

八  
西  
古  
物  
考

又

金抄卷第四

阿波國文庫

不老文庫

吉語部

世修言

此二湖水入亂後日可有之

由緒言

此前言

全玄抄卷之第四

阿波國文庫

不思文庫

言詣部

阿波國文庫

世総言 以二月半八日可書之

由緒言

利  
御箭言

世俗言

二  
「あらゆく さあを ひあくと まき 一 どきしり みそりせ  
さうよもじこめと 四 振 放  
とうりぬ がる 許正太久尔湯谷 色合  
四 う くし とよそ お望す月十八日 と 但多の えの付書  
みのふ ほめでとう かのうとの動のく や組屋役よつてく お引と  
おひげ年月をうとわら是も まつらふのり 万七  
おひげの年月をうとこめをとえよを  
三 うやうは おもての まうせ いづく おもてと  
主の身 たちや田舎 ぬよ 万よハねきとくさんそれもと  
やう 動あら男、されまへもあされえま秋を冬  
やう 動あら男、されまへもあされえま秋を冬



卷之三

と  
ト

內

T

一説うつし然又ちくらべとまも多より源氏おとづれを  
えもやうにそぞろとひきりあてもゆことのむや乃はをもひす

らもこのうきアラウムトヘリテルレタス

戊 ひよきをしゆうと  
己 舊也 いにしへをもせ

許容しきのとくは不許  
度

容はんと復讐抄  
もつまつ失言也

卷之三

蒙古文

まことに事あらじけり  
徳といひ財力也

物語の事の如き  
主として之を  
考へて之を  
考へて之を

肉身の  
含みをもつて、  
そのまゝ人間なり

赤麻  
ハモモウヘイ  
ハモモウヘイ

根之子也。故曰根之氣也。

城り方り地字とくそり  
本

かく  
深く思ふ人なり思ふ事あひきあきらこよむとけうる

まわい  
菜をとひきのまわいをいふ  
アラカツタケ

この日の夜は流りもつかず、さうしてまことに、行かねば

之にて あまくよせ まゆの うるそトくせ 源氏物語卷第十九



卷之四

卷五

い冬の  
ありゑうをもあは  
まむからひやくら  
がりや  
ある標準しきうり  
風うや  
有なれど  
万葉文書

まくらじ  
まくらじや力あつといめりやく  
まくらじ全幸とうさり

幸いとては全幸とうとうり

とえあればうらやましげじへまゐりとまくことの内ゆゑ  
りきり用ひをわざとかこもつておきと女房へくは年ごと暮  
きわざりとひなこあめくと在原氏をあか也

日向北風也  
在古邊

三  
をちか

卷之三

うちうち  
うちうち  
うちうち

ひとへりとひをめの さふそひもも 神まじ  
ひと神うねううとあらたり うううひとあらる神  
いりもみれとひと後教といひ神うそうそくひ  
我乃菜女系よ物衣のひはよひとそくよすめ見神すめう  
てひひもとそくねうまといひた大教後系相も食う  
後教教教教のくそくそくそくそくそくそくそくそく  
とほりむま謂之誠言非上但先例非無既も上位表す食後成云尤も  
ももこそくそくひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

身のうへんをもつて、勞作の  
心は、眞諦翁より教へ

とよひおがくとひかし  
もくへすらゆく  
とよひおがくとひかし  
もくへすらゆく  
とよひおがくとひかし  
もくへすらゆく

金華

心わて身をもつて  
心清め思ひのゆるて

卷之三

方ふせんくわゆる  
てもよみうへせまわらゆる  
うれほとめり  
山を登りたるより  
風のあらむ

卷之三

猿文也

わくわく  
わくわく

ひよそ  
もう一歩め

たまらぬ事多し

久のとよよと  
やひかり見渡  
きのり思ふも  
あひよ ちくわ  
ふうわせ

四

卷之三

妙方繁多。或隱。或明。或綠。或紅。而近曾未食無何日。而  
生之。亦復有合之。不復生也。朕亦禮見。如仰遙方。索。其。至

占方聯不及斐子細粗皴波作者うそよしよしの今

人皆基後流之猶忘先師哉

良の茶林院の寄合と、元と基後判主時代直徳は於源氏日記をつけて  
樂れむが、又、もとよりそのもので、やまとへたとすんと以此を基縁なり。

金へとあふるといひ方等は、殊に後世とて、より多く  
波乃下まゝをはき、さうして、今ある所のうちから、  
未だ定まらず、後移へらるゝよし、跡既終ての難を、  
基流の余

可おせ  
かへと云ふ事は、  
かくよきうるふがと風うりあひ  
いや年乃きりよきうるふ  
鷺ノ一色

卷之二

二  
七  
九

考せ事より御ゆきとて御身をすくに御ゆると聞り乍り  
わくと 並捕もまたの事と云ふ文類よむくの事と見ねりと、いり  
あひうゑを うながすものむきを也 五  
五  
後後後天物

後漢書



海をまくに足らずひまを組狭衣冠はるかに望み  
川うへ乃ちくのあうけまつりす  
さういふの如き ほきくもあへ 月をもむくまつり  
せを後移抄 五四

月日之既往  
亦復何能追

卷之二

まことに うかへ  
あくの處 暖めにふるひゆきの後風雪を  
のこぎりをもとす  
やどりえりゆれてけづらが風ふるひをもとす  
もとねりを  
あく あめくと  
あくまく うそちく  
あくまく うげり

わくめりうち  
ヨウラ  
ヨウ月

言ふ事の少くも思ひやうと  
合

おとづれ  
ゆきり  
もゆく  
えうわゆ  
あうまく  
のゆき

よそをわざうき  
縁せむるの面白  
優ゆきこり也

復水之也

わくよ わくうんも着やう短うよとそうちんもわくう  
いつまでもうまうまうまい

故人不以爲也。故人不以爲也。

うなよあづく うなづく うなづく うなづく  
うなづく うなづく うなづく うなづく

つるぎ只浦よりおもろいお萬歳をとよおとくひなすとおもふ  
もととくみゆきとくきとくら源氏うつむけのとれまくわぬと風

元  
打井水よ 万仞山ゆくよ 三千里

ひまやとふくらむを繕物口傳の様のたれ  
ひまやとひそんばかりす也



心かくすら 乞うてゆくのをもつて身のまへ候ふと云ふ  
見よともとハ例うねてらすまよひゆこと

### 由緒言

ゆくくくぬと 命也 まめにれひもく 痴也  
立興ね  
立ちよきもく 先き命の極く粗末物とかうんともくぬ  
立ちよきもく うそうそひて後輕用物を多くゆり  
あらわくうれ 百萬人といふとまくもくあらのうやまく  
うとまくもくをまくひよあらうり

とみのとみあも

但るなうひゆり

ぬくいえ、猶ふくまくあくの

とくがく

養の根

こすのと 余さむとも短

急の急つと

人を

きくき

かうきくえ今もかうと皆ひきりせよみ被ひくとせ

壁きらぬく見

只壁はあるを而あ帝からよけうの輕乃あ

ようちくきり

後輕お小あう

あくさく 萩木者柏杆ふの様ことつた城よも不候由後輕お

見後輕抄委

奥良うをきく意う人のあよきふとまくお

あらうと しゆく

お羽坐り川縞とけめ、舟の早子、わくよ

里うとえあうりよす

きくまちと云遷送

神りそ

まかうとゆうはう

うへくく

古ア矢う占のうタ

様へまう況見後輕抄

望御綱

交ル本多と後成流を瀧川上り

おおち ゆは入るのくらんあうすよ本をわせと  
そもも本をうてのうくみをとまく

刀のまくらひ 神代のうるまうまんとま神也神とねぬ  
えひ あきとあひうらわうとくへとく

えひ あきとあひうらわうとくへとく  
おとすまきとくへとく

おとすまきとくへとく  
おとすまきとくへとく

卷之四

十三

ぬも之を  
力より能く人じとあら

万葉集

五  
五端丸  
先人よりうんとむろ相也可望りより真ひ綱を犯さとつ  
等同相したてのゆゑにうつてのまもあくあとひたは

おまくし差あくまと見えても  
おどりとおどりとおどりとおどりと  
おどりとおどりとおどりとおどりと

相  
行  
底  
毛

卷之三

川在洛。原星祚。功皇后平。  
作天

物語一  
事云云  
やうく便

漫遊記

アキラ  
久松のちよと  
三葉在万葉

うまそ  
うまそ

やうのうご  
みゆき八十代やまく  
まことようち

まつりのとくら

老のまゝに  
うらやましく  
あり

卷之三

かくのうの  
まことの

この本の題名は「新編」とあるが、筆者によれば、この本は「新編」ではなく、「續編」である。

うゑのせふく うゑの峯也

思ひ出でり

あらゆる事に  
あらゆる處に

ひよのつり委<sup>ミ</sup>テ<sup>ス</sup>立<sup>タ</sup>ム

御内侍の事

الله يحيى

まく赤瀬川の名前から

いはづらうと  
林の暮く照見  
まろこひめうら  
わのくあれかた

五十九云

四

おのくあらわ

五十五年正月廿二日  
ひく ちちとまくわらひ日をとどけまくとひ日な  
とおり やえうら人 八十歳人也 痴のんせ而近日多病すまく  
まく やえうら人 やえうらもうつ人 いもくと風うなまこと  
不す別 先 金のうらまく たの今と 美のうれし うまき

次第より御内閣總理大臣の職を承り、國事に關する事務を掌る。又外  
交部長官の職を兼ねる。日本に於ける英國の領事は、英國の在日公使  
の職を兼ねる。

先を絶え世間の常とハ人睡眼と云ふ  
この神と云  
魔本とくもんと云ふけ人よそを取中小奇ありと云て

是之臣量君のくに麻まつてのくにてま  
る。あはせんもととまへて御よびの人へゆ  
きとく血と。あはせんわ死。是を神室にしらと云ふゆゑ。ま  
たのふよきゆきをまつてのくともうつてのくともいづれを只  
をとあら。又花菖流秋娘秋娘うりと秋娘をちよと贈た

おぬづかをひのこの  
天智崩時太后作詞

あとつづりくもら 乞きわまうのねりくもらきよみれを  
後耕抄 いづもひく 盗人と向うと易すとへを  
きうちこきよりもくわまうをあらそ  
きうちは益人のもとせ在後耕抄

ぬくろこと 乞きだりうきとうめえもくみ  
きどくせよまも後耕抄よいぢ

ひごひづきもく 乞きんとううゆ

うぬそほよし 乞きあくすよんふあらんと

うそよびくも見 乞ハ今よあう

かみりあく 乞ハ女娘を

まくらま

碧

ぬくしぐと歌 乞き安の地壁も

おちるゆといぢ

和漢文國字嘉  
中國新川和鶴  
名の同義者社  
祀神を用被松  
所居め是抄  
敷物に於樂座  
坐御抄

うきうねはく  
けくはく

碧

うきうねはく

碧

はくはくはく

碧

八經之精

卷之三

日每人太も吉野山を海毛も又常よりれあらしも多基後流よ  
あよもかくとねじとてまつあがまちもろのいれりのうりそ  
せきそへり金をねねとしきつと後れ流よハ非稻田乃面のを  
さりと推せり又流非波而逆代さるひのさかとトモリを遣ひよ  
ひのよしのを遣ふものと  
せきそめ田面ともに種くもあり 又ヘのわいの手をミシラ  
とよもる種よやせさんへるもひつりあり方十三 もろうたひ  
すとれしてひとひとえよひくよく力をあらぬ  
ゆくあふつとかく カみのうすくうとこういのりはよあらん  
とすひつるを受日とケヒツルを受日とケヒツルを  
恩とソラのしゆくもよすく  
くうやがくよめくとめく  
せきそ  
せきそもくそくそくのあらそくせきそもくそくとくらをまく  
不然但源氏早蕨をゆく中のまゐゑとくらすくも善通は  
きましれつことわきハヤとくらすくも善通は  
もあらゆくとくらすくも善通は  
よだはりのゆくまくとくらすくも善通は  
どうれゆくまくとくらすくも善通は  
志保くわくまくとくらすくも善通は  
もゆくまく

八  
卷之二

十一

の如きと並びうなづきまつたものあそりよむひと月ハシマヘキ  
レノヨリはんやつてつらひあり也未云判志の詮ナニモ

卷之三

天地のよきよみよく。ひはととくとあまよみよみ  
天地のよきよみよく。ひはととくとあまよみよみ

石と同素のうなづきは、もとより、

誕生わくゆめり片の私とよどみ  
ぬくのトのあくまく皮ふをくらうや片衣を疏

和志始立郊游以村子負厚陰海若上之至二石大

卷一尺二寸六分圍一尺八寸六分高十八分又分也小  
大二十圍二尺八寸高十寸寬十分也如鵝子至長

始不勝憚而猶住住及望風也小石船也甚妙  
壁叔

敬平穀之不直而之之之志源以也而生本人下焉跳拜  
右老也。同息長是女命正付乃。至矣之時。周旋而後解。其  
科  
神

うさぎの毛をもつて、母本から毛をとり、  
うさぎの毛をもつて、母本から毛をとり、  
孫

てかみまろとくわのやうをねまし

多處と手引を先  
方暮がちひあらえへり生ニモ  
力能めりねよづくまとゆくはあらめと

切ら本のよきをかうせぬひらか  
へりとくめのからうふをゆまうあらわす

八雲抄

十七

滿藝う氣は家觀もぢきわらうをあくまでも未だ  
之が今あるまへとくらべてみてもとひどい方

同事たち  
おもろいよ  
九

はるかに見ゆる所  
先もあつておまへて  
とくとおゆよといつせうりとしまま田もとつ  
うちおをうけよしゆくをもくわきりよひ  
裏す。まもわくれやあひげとのふみぞれよ  
かく海とよそらを五十二。

一葉の、いよいよ梅の花うらを梅のそれのやうに見  
ゆき、さうしてとては居一段とうとくをみる。

つまらへば、とひらひよわすち方策は多種と  
まきもつかこまけらへぬ事とばかりするが  
もううらしおりわたりやうをつけていたるがゆゑ  
くまのほきうのくわいがゆゑてゆきをせらる  
せ極めのゆうう道す様のほきうをめぐらし  
ありは痛おゆいゆきう

一中へよんとわしもくもくしたむかうかへ也す  
のとちくくはこひは案もとうちくもくかくや  
をもくらせ修業相違のむゑおとくにた  
そといづれ風うやくはこひくもく間又教えれど  
くよは皆くへらむや

一あきゆへのしゆくをきしわらひのむねをこゝに  
トあくく魚也是を紀矣と考矣にかくの事  
えうきよふてあらもとふうどももとを改安  
まの少く考矣罪よほろくと多くあらむ  
一びりやうをそくらく行も船のうりふわういと  
どもやもとく酒よ うきも詠歌に年正月よほ  
きる経文及くはの間ふといづらさすがわを  
れきのほれ吉月聲お繆樂わきひもんづら  
まつよ天音雷の雨下のまのうらもくはうひ  
しことどももくらよひ歌ことわざりー記ふち  
一歌ふ聲にうぐくやまの事とくもくわる  
まきうらせうるをせぬのうらよいてくうな  
歌トは捕物するを修く祝ふを教矣とくと  
にうち但方紫才十人六體化挽短笛をじ河井がま  
の色とてあらひとくとくいんがくわうかくとく  
あらひくもいづくくもあくとくひうな  
きうらふいをくらうとくいんがくわうかくとく  
一物處のゆうをくらうとくいんがくわうかくとく  
あくまし四十までとくいんがくわうかくとく

脚注

うあひじやもといひうりき  
とうちち柳田庵をまよひてゆる村主宴松波  
御びきたゞらうのふを引うすわうとうひいやひも  
董うそんとく地うつ物うりは捕おほをわり  
一やこよれこ乃橘のいやうりよかうたゑをいはむ見  
ふとほ是故天主を難病アリに定め難病を攻め  
左大膳橘徳先をかせに御承認宴アリ人アリも  
御承認の橘千の板石つらむとわら是故アリ、  
川口御主府ぬと乃橘もまことわらはれのせく  
よもりとよみのきわくよのまうらをまう里  
近處アリとし極アリとよわまうらやつづく  
太志なりとそ統アリを 一子

一わひ四うみんとくま大うそんのくらよがく  
くうと是とわひ是とくとをもんせんせんくらう  
也大てううともをぬよとをぬくとくくまくうの  
きりへよりくさんへせんきれとあるといつち  
乃きくうとくまアリとくまくじくらぬ男うつくぶ  
川の力が無くうきひとくめくじくとわのやく  
あううらのへらくをくらぶがくとくあくやく、  
女男らぬもうアス乃男せうもひとくめを件の女  
一ありあも見太わね



御仙と同姓うがまひて名てひきぬけむりとあ  
ものありすくともあくまかわらなくもくじゆ  
わくまくわくとひきのうとほよりきちよめんせこ  
よみよみよとちよきともかわせ東みわくよみ仙  
がくわくわくとひきのうとほよりきちよめんせこ  
よみよみよとちよきともかわせ東みわくよみ仙

雄の天皇はもとよりおもて  
のあくをよびと  
とくにせきのくがく  
めうわゆるかくとく

かと承り候事ありある事よなとあくへぬくよ思  
もうそわとのことあるんとひれを祈りて  
ひとのじとわくからくもととせらの  
男處とまふわくわくわくわくは逢ひゆふ下  
ともうてものもこととくわくはゆゆいと  
おとくのひきぬましもつまうけうをたちま  
ちる年よりく年よりく年よりく年よりく年  
おじうもまくまくまくまくまくまくまくまく  
くまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
くまくまくまくまくまくまくまくまくまく

卷之三

卷之二

久里ふみ 天平七年正月五日  
ゆきくまをせうの理教といひくわまくわの理教  
とくま一きうせよはとくとくわよまくわの大納言  
大納言人りかよづらをねよはすいじくよづらを  
於是大和衣川令婦依解藥の經と用温泉不養  
医女ひらとうたりて化じうせ  
一  
見

足渡のしおを禁じぬるありあらずと云ふ事  
二人をゆく事なくうちかく死せらどこ  
もかきかわくわくんはるひりうよじめの花  
うゑく思ふてらのみて乃はきらりぬまとう  
い草むさく梅乃花

一  
すみぬとのおへゑうねもむれりよかへばは  
をふうのいも下レれとしはまのれどもくれ  
もかねくねよ大娘よとく生る姫子也レ女教也レ  
短音よたらまとのよとせみわうらゆまてわを  
のよのをともあよ乃ミテがひくわきもといりあ  
それの壁乃花せうていつまの花とさうれつを

祀乃々奉ふともあまを月をも下へすとあらむ  
うちもあま不祭但の祀もとくらうと祀もせ  
**一** えのそむじはとくらうと祀もとくらうと  
れりせひとじのそむじはとくらうと祀もせ  
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと  
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと  
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうと  
素めらがおもひづりて冷いたもことくらうと  
もくらうとくらうとくらうとくらうとくらうと  
もくらうとくらうとくらうとくらうとくらうと

**一** ちらしひのふうきよまぬくもくにとくらうと  
玉とわくしらしひのふうきよまぬくもくにとくらうと  
は花經浦がふよ云不深也前まかま花をあど  
ふんをうひまよめんとくらうとくらうと  
取くうあくもまくらひあくうるせまくらひあくら  
なぐうあくもとわくしとくらうとくらうと  
まわひまくらひまくらひまくらひまくら  
ふくらうとくらうとくらうとくらうとくらうと

松葉

赤葉

白葉

青葉

紫葉

黄葉

白葉

青葉

紫葉

黄葉

白葉

青葉

紫葉

黄葉

**一** さもむとゆく神の神をやうとくらうとくらうと  
あとのそく人取らば年紀天熙太神は猿を猿  
下とわくらうとくらうとくらうとくらうとくらうと  
よほま多よ靈天うかく神とうひ魂神多吉上  
あくえをえらうとくらうとくらうとくらうとくらうと  
せうくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうと

八  
卷之四

三十四

といひひきよせさんへもくまことくさ  
わづかうづかは千枝神とほとて向てのこまも  
くらしきみのんよきよきよきん氣をいつ神と  
あはくもねえ等やく天體見聞是神乃様あり  
葦原中よきいの根ありともあれもむくわい  
ぬれもあ標火火くさとくわくは月曜月曜  
あ和也煙 一 わく山をそくゆる事よりのわざれども

行もとあく方來才十六云葛城主遣手陣與之  
附書曰汝承緩急異委於阿主也不悅怒色取而改  
後飲饌不肯宴樂於是之弟采女風流娘子左之推  
暢右之持方盤手之生膳而詠曰余乃主也酒既醉  
飲終日云云し手遺左方來亦不許之葛城主乞請其事  
太郎擣沙兄弟あり

一  
左  
まよひうりのよよこもるともとくせんと思ふ  
あらうめくよじうへりくふえうきもふうも  
わらめへと今よも覺えれども併傍うせと  
ううかくうへりよもとらんといつてふせ流大河と  
ひよひよのうへりふうりとくらうやう  
めうめうせりくとくらうやう  
せりうめくよおめふうわくふわくせりうめ  
ううめうめうめうめうめうめうめうめ  
とくらうめうめうめうめうめうめうめうめ

風俗ノ事  
取扱

一 あまくれ乃ちりやいはくよろこの被乃るもち  
汗よのくふら是を充草内附よしれゆ。ぬる  
をのとすとすとすとすとすとすとすとすとす  
てうこきつよそもうちすりすり紙をくわす  
らひくめどあふくくいとくもくもいとく  
つまくまじひかづきくまくわんわりゆくと  
ひれと翁人の年はきくらといなりすまえ  
あめとひんまくせねじくよろともゆうよ  
せるよりかりうぐみとせじまのふくくとが  
き紙風俗のすよまくまくれひくめとゆよみてわ  
あくらきやうれしまいようかりくみよこゆるまの  
あくらきやうれしまいようかりくみよこゆるまの

一

ちの風のゆゑ乃ちのすのすまくに見てよつしよ

ゆくもかと

ひうの天平慶安二年正月三日

行後監寺主事の令均於内裏之東廬廻下

即

集宴于内殿御内裏之東廬廻下即而主事

意地主事の並殿旨各陳の詔作焉也右玄石中母

大体官称あむ地主事大義政不謹奏之也是よもよ

でくえを只知る乃ちくようりアモルもよ

トスルを而後執以侍と胸もと未波不謹奏也

以と終よる日ねと引具てくれよしりくじつ

の為の日うのこすとちくせとさり又思也

かよたまく紙といふるうを流よきりあめりと  
とれどんまつていつらをぬとくの幕とき  
えりてすましとて乃もとをやめんじく玉くと  
おみゆくスラムをまつまくとひくと  
はうちのふきにほきまくへうそとく松が  
よもやくらんきわくとくにくらんとくにくらん  
消息の事人うやうらうあうじとく今よぬとくぬ  
ああどりやうくらうりもれら乃不<sup>アキ</sup>ぬまく  
とくまくまくまくまくまくまくまくまく  
うへまのうへまのうへまのうへまのうへまのう  
僻末也後成ひからまくはとくをすあどいくせゆ  
母相處せばの事はとくをまがとくとくとくとくとくとく  
体うきともく思波れ

一  
九 かみゆの池をよむてろそり薔薇があくまくの  
色乃てくろこ是をうかがはくやくまくの池の薔薇乃てくろ  
かくそとくそくやくまくの池の薔薇乃てくろ  
きいわと始せぬくきい薔薇とくとく一統歌の帝莫  
とまどりていつりいま風も葉も薔薇うら葉葉み  
れわる薔薇うら葉葉み下一半薔薇うら葉葉み  
えくまくまくをあ流す下一半薔薇うら葉葉み  
ねあり是も後教役せ後成をまくとくとくとく  
かくかく流すよむりとくとくとくとくとくとく

かくらん一毛もあちこちあよき神事あるとあひて  
めの上へゆく神事系と多くわせ後れをえなり  
といまが神風様えり神事ありもよひよか  
事  
事なる人のれよきうどもあがゆく  
一毛もあれだらかみのれよか  
うにそぞらは後り纏松いつらをまつま  
えてもよしめあるとさり乃よらすらとくと  
はらくあふとえめくまくとくまくとくまく  
あといひゆこいとえもしゆようふゆ  
めりのこのゆくよみのよきがくとくんを  
きよみとけじやくまくとくまくとくまく  
しよ、落多中一人の女流とひとまくびりぬ  
あうちとゆゑくわきくおる猿をみくらむそ  
尾とひうきくかくねれてよわてくまくらむそ  
ちゆくとくまくとくまくとくまくとくまく  
一毛もあれくらひよいをくまとかくねくまと  
とみくらひ是がわく坂上家大娘よ歸るを  
縁故年復古相安は來うといちあくとくとく  
冬き女よわふれうがり方本よわくといづく  
あくせうとまんとそれたえまくとくまくとく

高  
壹  
一毛もあれくらひよいをくまとかくねくまと  
とみくらひ是がわく坂上家大娘よ歸るを  
縁故年復古相安は來うといちあくとくとく  
冬き女よわふれうがり方本よわくといづく  
あくせうとまんとそれたえまくとくまくとく



おれもひのねふ  
はるひわうし

一 うきよのをくまひそかのうかくおれよ  
二 獨める  
三 けろくわく

あやめ中山ひうち一派よりりうをもとよもうちと  
後れもて教とひきり又古今のうと教とくとく  
ふうひもくひ乃ふのとせよもとよもよもよも  
とくとくをもくとくとくとくとくとくとくとく

て教よみがえりとくわくアキラキトヨシわらぬ  
せんじゆくわくを要之トホ龍目記より一抄也  
是もやふそじうりもととそももやうそじうと風  
氣もわざれセ<sup>タリ</sup>ともうまくはらきやね又く御と  
もくちとくとひせうきものうゐの内條うち一派  
よよこやぢくゆのや乃中山といひ

一家之私をちひき乃石とすもうらぐひよ徳てえり  
乃のまゆうしらひの石を千人そく引取かりか  
ねむらむせむらとせられとひよをとるをよ  
せしむるを稀んと云ひて乃のうあくと神之孫  
伏木多乃の御子と云ふ一ノ子の御子と云ふ也  
細説不能動之

一あかねこをわす乃うもとくらほのそうと  
うれよきよ 何えれけきうわるトモ

一しけうのあらわしよりおこへこそわひも多そ  
と年をくりとむわひ、あくべとくえ八年乃至  
のよきあくべ、世人よきとむわひにて、もろひ  
とがく、いもよきり年をくりとく八年をへりと  
ぬを乞うる者也

まろく生める是正月朔日吾謹多承承うき

卷之四



ひ跡すうよんとあひたるがよとてぬとうもとを  
おれが代お神是日神。まえ右のまよひかをさらば  
せきの外と月神とて月神月よりて神也  
一 もともとしこひともとのわよけと有りくら  
まちつまくと風もじうしばれふる海也とまよひ  
もよし海を海乃ねまよひとまよひとを人鏡  
やわまよひとよひとよひのゆき日のくられと  
魚くまよひとよひとよひのゆき日のくられと  
一 いとく自こもとよひとよひのゆき日の  
よひくらうとよひとよひのゆき日のくられ  
高夕陽映川うりうらうとよひとよひのゆき日  
えりとせあうとよひとよひのゆき日のくられ  
一 わくよ月をうひよひのゆき日のくられとよひの  
ゆき日とよひのゆき日とよひのゆき日とよひのゆき日  
えくねりまよひとよひのゆき日とよひのゆき日  
ス木のそらとよひのゆき日とよひのゆき日とよひの  
うちとよひのゆき日とよひのゆき日とよひのゆき日  
うよひのゆき日とよひのゆき日とよひのゆき日  
移々先氣名荒云月守とよひのゆき日とよひのゆき日  
十六日とよひのゆき日とよひのゆき日とよひのゆき日

あとのすすり外曲云月のゆよ極めうふゆくし妻炭  
縁え簡浮松地の簡浮樹わり一名波利賀多一名旅樹  
あさ八百字千里樹波月ゆよ観せらるるよういきよが  
すまつせとくと月のゆよのうけよもよこころらる  
一秋ノ月あくとてまつるよくわかづくれをま  
くもうあくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ひか日お紀月の代ま神海中よ八重蒼柴難とば  
くらくくらくらもとねといそ

一月氣のゆよとよどめくらうよとびのゆよともあくぬ  
といふせんまううかくよる。ともとよくぬとよくせん  
のうよまうよとせん魏武帝月波星稀鳥鶴南毛燒樹  
三画何枝可伸と云ひ也

一也はくらうよとよどめくらうよとびのゆよともあくぬ  
とよくとよくとらんゆづらうよとよとせん  
く草原中寒乃歎鬼とよくよとせんのうりあ  
もと即取をもとせす下照姫とめどるゆづらうよ  
よとせすの内よもむ室をもとわやもとくかうなれ  
しとけりもととくわめよくもとくわめよく  
ううふくゆるよくわめよくもとくわめよく  
へまくもとくわめよくもとくわめよくもとくわめよく

あつまえと風乃あくよだれとくじゆきや



ひをねくとあ

一わのいまゐ山のそなへをのまへとあと  
うきよしむりとて  
宿温未<sup>レ</sup>とがどゆよとくゆこみわとす  
かよものまゐしものるとよくさくにまくらを  
ひづこうき山のわく、いとありあも目せ紀<sup>レ</sup>問答  
おのたれとくらまきも山のまくらをまくらてわ  
すびく衆<sup>レ</sup>とくらまきわいのぬまくらをまくらてわ  
座拂ふみ一角仙人といふはわらむひよの角お  
ひくせこわくわくわくはまくらを拂くとくらを  
えくらわめあくくやまくらわくまくらを拂くと  
とくらを拂くわとひくへくまくらをいふ  
うも見度<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>十七を刀よと衆人いつくわ蓬<sup>レ</sup>  
あわひまき山のまくらを拂くとくらを拂くとくらを  
うくらつとだくらうせまくらを拂くとくらを鳥帽  
みとくといたする鳥帽<sup>レ</sup>よげの少くらうねけ  
えねくらうとくらを拂くとくらをひまくらを  
男物<sup>レ</sup>とくらを拂うとくらを拂うとくらをひまくらを  
うくらを拂うとくらを拂うとくらを拂うとくらをひまくらを

ひまくらをひまくらをひまくらをひまくらをひまくらを

と毛神もくもを以てとひまくもをあう  
きのうちよもんひどりありくすよとのくえ  
ゑぬいはくわまもくもふらひとれくらまし  
あくまくほりれとくらむくわくらひく  
スホくまくわくわくもとくらせふくくもん  
うともくらせりまくもくもくもくもくらせ  
めくらせがくもくもくもくもくもくもく  
かくもくもくもくもくもくもくもくもく  
ばくもくもくもくもくもくもくもくもく  
よへくもくもくもくもくもくもくもくもく  
云はくもくもく

一  
えのくはりいはくつよもくら  
うらましやくの園えんまくはくとくらむくく  
をふくもくもくもくもくもくもくもくもく  
おありふくもくもくもくもくもくもくもく  
りもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
えあくしやくもくもくもくもくもくもくもく  
わく

金言卷第四終

阿波國文庫

110X  
151  
7